

「国語国文学研究」第四十九号 抜刷
平成二十六年三月六日 発行

熊本の児童文学

今村葦子『ふたつの家のちえ子』論（上）

―作者の生い立ちからの考察 作品前半を中心に―

堀 畑 真紀子

熊本の児童文学

今村葦子『ふたつの家のちえ子』論(上)

—— 作者の生い立ちからの考察 作品前半を中心に ——

堀 畑 真紀子

一 はじめに

今村葦子は1947年、熊本県球磨村に生まれる。物心つく前から父方の祖父母の家(球磨村・渡)で育ち、九歳の時、祖父の死で家族の許(球磨村・一勝地)に戻る。この生い立ちを題材にしたのが、デビュー作『ふたつの家のちえ子』である。

本書は、1986年に出版され、第二四回野間児童文芸推奨作品賞、第二回坪田譲治文学賞、第三四回芸術選奨新人賞、第一〇回路傍の石幼少年文学賞を受賞する。当時の書評では、清水達也氏が「情緒豊かな家庭風景がみられます」^①とし、長谷川幸男氏も「生活のなりわいのひだが、みごとに照射されていた」^②「人間愛への讃歌が聞こえてくる」^③と述べ、双方とも作品を高く評価する。その後、砂田弘氏が、作品の特長を三点、即ち「巧みな構成」・「人物の形象化のみごとさ」・「個性ゆたかな文体」

を指摘するが、「背景となつてゐる時代がはっきりしない」^④とで現代の子どもにとつて受け入れにくいだろうと主張する^⑤。また、細谷健治氏は、家族が持つ問題や桎梏に触れず、「幼子は幼子らしく、母親は母親らしく、父親は父親らしく」という具合に「らしく」の理想の下で描かれていることを批判する^⑥。奥野恵氏は、作者のメッセージを、主人公の「居場所を失うせつなさや不安を痛みとして引きうけて、『成長』していく」姿にあると解釈する^⑦。

また、「原風景」の観点から児童文学を考察した論に、宮川健郎氏の『「原風景」の考古学について』^⑧がある。そこには、次のようなことが論じられている。高度経済成長に伴い、都市では水田を埋め、山を切り崩し、宅地化が進む。また、日本の至る所で公害問題も発生する。この状況を背景として、児童文学者達は「原風景」を描いていく。そこは、アメンボやゲンゴ

ロウのいる川、空襲で焼かれた町、見たことのない北の森、北海道農村、都会のはずれにある原っぱ、コロボックルのいる小山などであった。彼らは、このような原風景を描いていくことで、当時の閉塞状況を打破し、乗り越えようとした。

この宮川氏が論じる「原風景」作品群の一つに『ふたつの家のちえ子』を加えることが出来ると考える。当時、今村はコピーライターとして広告業界に身を置いていたが、「大量消費」を推奨する仕事に「迷いや不安」を抱いていた。古本屋でルナール『にんじん』を目にしたことで、小学時代に読んだ児童書を思い起こし、「都会にないものがすべてととのっている」ふるさとを再発見をする。そこから生まれたのが、作者の半自伝的作品『ふたつの家のちえ子』である。

本稿は、作者の生い立ちから作品を読み解くことで、1980年代の状況をどのように乗り越えようとしたのか、また、それが、後の今村作品にどのように引き継がれていくのかを考察するものである。

二 今村葦子の生い立ち

今村家は代々、球磨村渡近隣の山林農地を所有し、戦の折には刀をとる郷士の責務を担っていた。葦子の曾祖父、今村米吉は幼い頃より漢学を修め、三十年間渡の村長を勤めた。米吉夫妻には、渡で教師をしている一人娘タケがいた。タケに、婿養

子として人吉市の農家の次男で、教師をしていた政男を迎え、家を継がせる。1916年、葦子の父忠泰が誕生する。今村家において、56年ぶりの男子誕生ということで、一族は勿論のこと、村人からも祝福される。忠泰という名は、一族の長老組によって命名される。忠泰が七歳の時、タケが病死する。乳飲み子と三人の子どもを抱えていた政男は、まもなくミユキと再婚する。ミユキは、佐賀出身で、軍医の兄を持つ看護婦であった。祖父政男とミユキの間に四人の子どもが生まれ、父親の兄弟は六男二女となる。政男とミユキは、八人の子どもを分け隔てなく教育し、長男である父忠泰に今村家を引き渡すのを使命と考えていた。このミユキその人が、葦子を実子同様に育てた人であり、『ふたつの家のちえ子』の祖母のモデルである。

父忠泰は、跡取り息子であることから熊本師範二部を卒業し、教師となる。熊本市立碩台小学校勤務時代、同僚の竹崎テルと、1941年に結婚する。同年12月、太平洋戦争勃発。翌年1月、双子の長男・次男が生まれる。世の中が戦争へと突き進む中、父忠泰は熊本師範専攻科（現熊本大学教育学部）に入学する。その間、母テルと双子の赤ん坊は、渡の祖父母の家に身を寄せ、忠泰の復職後、再び熊本市に帰ってくる。その後、長女が生まれ、家族五人となる。1945年7月1日の夜、一家は熊本空襲に遭う。命からがら逃げ延びたテルと二人の子どもたち（長男は跡取りということ、祖父母の家に疎開していた）、そしてその日宿泊していた知人は、白川縁で忠泰と無事を確認し合

う。翌日、忠泰は妻と子どもたちを渡の祖父母の家へ送り届け、一人熊本市に帰る。一ヶ月後の8月1日、忠泰は人吉市青年学校勤務となり、渡の祖父母の家に戻る。一年後、次男が栄養失調で発病し、生死をさまよう。この時、テルは葦子を身ごもっていた。1947年1月、葦子（本名 淑子^{しきこ}）が生まれる。母テルは病弱な次男に手を取られるため、赤ん坊の世話は祖父母が分担することになる。翌年、父忠泰が渡中学教頭と組合書記長を兼任することになり、一家は人吉市への転居を余儀なくされる。幼い子ども五人、中でも通院を必要とする次男と生まれたびかりの葦子の妹を抱えていること、また、葦子だけは残して欲しいという祖父母の要望から、両親は、葦子だけを祖父母に預けることにする。以後、九年間、葦子は祖父母の家で暮らすことになる。その間、葦子と祖父が父親の転居先を訪ねたり、母親と妹が祖父母の家にやって来たりと、互いがふたつの家を行き来する生活を続ける。このような生活を、幼い葦子は自然の事として受け入れていた。また、祖父母や両親も自然の成り行きとして受け止めていた。当時、この地域では、祖父母の許で子どもが育つことは珍しいことではなかったのである。

その後、父親が一勝地第一小学校教頭職として着任することになり、家族は一勝地（球磨村）に転居する⁸。翌年、父親が発病し転地療養となり、一家は一勝地の山の上の空き屋に移る。母親は生活を支えるために、山の青年学級で働く傍ら、休日には、近所の寺で裁縫教室を開いた。このような時期に、祖父が亡く

なり、小学三年生の葦子は父親不在の家に戻る。祖母より「内弁慶のアマノジャクなのに獅子笑いする子」と言われていたように、葦子は人前で喋ることを苦手とする代わり、よく笑う子であった。母親も村の人に「口が重い子なのに、笑い上戸で」と葦子を紹介した。人との会話を苦手とし、母親を「母さん」と呼べなかった不自由さは、お喋り好きな妹の後にいると解決できたようである。例えば、妹が靴をねだり、母親が買ってやると言う。その時、葦子が笑うと、母親が葦子も欲しがっているのを察するという具合である。祖父母の家を離れても、祖母への信頼感は揺るぎないものであった為、葦子は、日々の生活に専心することができた。作者は、当時を振り返り、適切に見守る目があれば、子どもは置かれた場所に適応する力があるし、大人が考えている以上に逞しいものであるという。

葦子が小学四年生となった時、父親が退院し、一勝地第一小学校の教頭職として復職する。同時に、葦子の代理担任となる。次の文章は、その時のことを述べたものである。

幼児体験が人の一生を左右する、ということが真理だとすれば、私の場合は不運でした。困惑したときに笑う、しかも調子はずれに笑うという私の癖は、あきらかに、幼児体験として獲得されたものだからです。いまとなつては、何もかも昔ばなしということになります。そのころの『世の中がねじまがつてしまったような感覚』を思いだすと、私はいまでも、わらいだ

さずにはいられません。なぜそんな不運にみまわれたか、説明するのはいまいいのですが、かいつまんでいいますと、私はものごころつく以前から、父方の祖父母の家で、家族とはなれて育てられました。その後、祖父が亡くなり両親の家にもどりましたが、小学校の教師だった父は、ちょうどそのころ、胸を病んで療養所に入っていました。つまり家にいたのは、母と兄弟姉妹たちだけだったわけです。それから二年後、のろまな『ばば育ち』の私が、ようやくのことで、『かあさん』を『かあさん』と呼び、兄弟姉妹を兄弟姉妹としてあつかえるようになった折も折、幸運にも病状を回復した父は、家庭にもどり、学校にも復職しました。その機を見るようにして、運悪く、私たち四年生の担任だった若い先生が退職されました。そしてどうなったかといえば、たまたま同じ小学校の教頭職に復職していた父が、私たちの代理担任をつとめることになったわけですが、家には不馴れな父がいて、学校には代理担任がいる。しかもそれが父である。―それはまったく、子どもごろにも奇妙な体験でした。それもそのはずで、その幼児体験が、いまに尾を引いて私の今日があるのです。なにせ、どこか気はずかしくて、まだ『おとうさん』と呼べない『その人』を、学校に行けば、こんどは『先生』と呼ぶわけではないのです。もうそれだけで、私の体のおくのだこからか、くつくつと、とどめようもない笑いがこみあげてきました。しかも、おとうさんでもあるその先生は、学校では当然ながら、妙によそよそしかったり

して。いま思いだしても、苦しいような気がします。(中略) その年のたしか五月に、母もまた、自分の夫の家庭訪問を受けるはめになったのでした。できの悪い『ばば育ち』の私のことを、二人がどのように話合ったのか、そしてその二人は、はたして「担任と母親」だったのか、それとも「父と母」だったのか、ともかく私は家で、父から、一年生からのおさらいを受けることになりました。⁹⁾

ここで今村が使う「不運」とは辞書的な意味の「不幸」というではなく、滑稽、面白い、奇妙という感情を含む「不運」である。つまり、作者は自分の「不運」を、面白、可笑しく受け取っているのである。やつと、「かあさん」呼べるようになり、学校にも慣れてきた矢先、父親が復職し、葦子のクラスの代理担任となる。家で「とうさん」と呼ぶことが出来ないのに、学校では「先生」と呼ばなければならぬ。父親の方も、自分の娘を、学校では生徒として扱い、果ては家庭訪問までする羽目となる。読者も思わず笑ってしまうような話である。実際、作者は祖父母との暮らし、家族との暮らしを、今も昔も自然のこととして受け入れている。それは、周りの大人達が、幼い葦子を愛情を持って見守っていたからであろう。

葦子の両親、忠泰とテルの我が子に対する教育は、子どもの個性を尊重し、見守るというものであった。例えば、葦子が家族の許に戻って来た時も、母親は特別扱いをせず、子ども達の

事は子ども達に任せた。また、夕食時は、父親が、自らの失敗談を話題にして、子どもたちに自由な発言を求めた。一方で、不平等と差別には厳しく、兄妹妹は名前で呼び合い、呼び捨ては禁止した。途中で入ってきた葦子は、兄妹妹が、上下関係なしに自己主張をしている様子に驚いたようである。

双子の兄達の高校進学を機に、一家は、渡の祖父父母の家に戻る。葦子が小学5年生で、自我の目覚めに差し掛かった頃であった。父親は列車で一勝地第一小学校へ通い、母親は代々の土地を守るため農業に従事することになる。無口で内気な女の子は、渡の豊かな自然に戻れたことを喜び、近くを流れる球磨川の岸辺で、服がぼろぼろになるまで駆け回る。その一方、一勝地時代に出会った本の世界にのめり込んでいく。球磨川の自然と物語の世界の中に、自我を解放していくのである。そのような時期に、ルナールの『にんじん』と出会う。この本は、葦子にとって「忘れたい一冊」で、「図書室で読んだ本はどの本もおもしろくて友だちに話さずにはいられませんでした。『にんじん』だけはそれができませんでした。その理由を考え、くり返し読んだのです」¹⁰と述べる。これまでの物語世界と異なった内容を持つ『にんじん』を、多感な時期に手にし、葦子が何を考えたのかは想像するしかない。が、作者にとって大切な一冊であったことは間違いない。だからこそ、後に、この本が児童文学者・今村葦子を誕生させるきっかけを作るのである。

祖母ミユキは、忠泰に本家を継がせ、自らは忠泰の義弟の家（隣の家）へ移る。忠泰から同居を勧められるが、隣の家で子守をしながら隠居することが、祖母の希望であった。祖父政男と祖母ミユキの使命が、ここでやっと果たされる。葦子と祖母の二人の時間は、葦子が成長するに従って減っていくが、年数回のお墓の草とりは欠かすことがなかった。その時、祖母は葦子を幼児の頃と同じような扱いをするのに対し、成長する葦子は祖母に甘え、守られていた幼少の頃を回顧するようになる。人吉高校、武蔵野美術短大（現武蔵野美術大学）へと進んだ葦子は、広告代理店の制作部に就職する。日本は高度経済成長の真っ直中にあつた。コピーライターとして、時代の最先端をいく広告業界に身を置くうちに、「迷いや不安」を抱くようになる。そんな時、古本屋で『にんじん』を目にするのである。この本は、小学校の図書室で読んだ沢山の本や、それらが語られてくれた「希望や憧れ、夢や勇氣」を思い起こさせた¹¹。そして、「都会にはないものがすべてとこのっている」ふるさと「再発見」¹²の切っ掛けを作ってくれる。ここから、今村葦子の創作が始まる。当初は、仕事をしながら、創作をするという生活であったが、後に、作品依頼が殺到し、後者に専念することになる。

初期四部作¹³のうち、三作品は雑誌『子どもの館』（福音館書店）への投稿作品として書かれた。「つるべつ子」は1980・12月号、「あほうどり」は1982・7月号にそれぞれ掲載さ

れる。この後「ふたつの家のちえ子」を執筆するが、『子ども館』の休刊で、やむなく評論社へ持ち込み、半年余り後の1986年、出版の運びとなる。また、この出版を待つ間、「良夫とかな子」を執筆し、翌1987年、評論社から刊行されるこの四部作について、作者は「まったくのただ書きたいから書いたという作品^{『』}と述べている。

葦子は、言葉で表現する仕事に就きたいという思いで、広告業界を選んだ。しかし、そこは能力主義の競争社会であり、大量生産・大量消費を推奨するところであった。紡ぎ出す言葉は、心の伴わない記号であったと想像する。子ども頃の読書体験から受けた、感動を醸し出す言葉、自分の生き方に影響を与える言葉からは程遠いものであっただろう。古本屋で『にんじん』と出会い、自分が何を書きたいのかと自問自答した時、葦子の許へ物語がやって来た。それは、高度経済成長から取り残され、今も昔と変わらぬ球磨村の自然とそこに生きる人びとの物語であった。豊かな自然の中で、慎ましい生活を営む人々の心情であった。「ふるさと」の再発見である。そして、ここにこそ閉塞的な状況を乗り越えるものがあると、葦子は確信する。「書きたいから書いた」という初期四部作は、作者の原点であり、以後の今村作品を方向付けるものであることは言うまでもない。そして、その中でも半自伝的な物語『ふたつの家のちえ子』は、今村作品の原点そのものと考ええる。

作者が歩んできた道を背景にして、『ふたつの家のちえ子』

が生まれるわけだが、実生活が作品にどのように投影されているのか。そして、1980年代の閉塞的な状況を乗り越えるものとは何であるのか。次の章では、その二点について考察していく。今回は紙面の都合上、作品前半のみの分析とする。後半については、『ふたつの家のちえ子』論(下)で論じる。

三 『ふたつの家のちえ子』論 前半

『ふたつの家のちえ子』は、1986年に評論社より出版される。この本について作者は、「物語が私のところにやってきて、私がそれを書きとっただけ^{『』}という。『あほうどり』・『つるべっ子』で、故郷球磨村を描いていくうちに、「ふたつの家」を行き来した幼少時代の物語が、作者のもとにやって来たのである。本稿では、作品前半を作者の実生活と比較することで、共通点と相違点を導き出し、それぞれの意味を考える。

作品前半は、ちえ子と祖父の生活を描く。
「1. 子守りうた」

夕方、遊びを終えて、ちえ子が仲良しのじゅん子、はるえと別れるところである。友達二人は、迎えに来た母親達と帰途につくが、ちえ子は一人で家に帰る。家の前には、腰の曲がった祖母が待っていた。ちえ子は「あっ、ばあちゃんだ！」と大声で叫び、祖母の「かっぱう着に顔をすりつけ」で、大好きな祖母の匂いを嗅ぐ。夕食時、祖父が晩酌をしながら南の国の話を

する。それが面白くて、ちえ子の箸が止まると、祖母が「またろうがねろうとる」と注意する。祖父の話が長くなりそうな時は、「てんぐが来なけりやいいがね」と嫌みを言う。梟が鳴き出すと、ちえ子は祖母に連れられて、離れへ寝に行く。

【解説】

六歳になるちえ子は、祖父母との三人の生活を当たり前のこととして受け取っていた。だから、友達之母親から「小さいのにえらいね」とか「おばあちゃんがやさしいからいいね」と言われも、「なぜ自分が偉いのか」「おばあさんは優しいに決まっている」と思う。テレビのない時代、1950年前半頃と思われるが、夕食の時の、祖父の話もご馳走であった。話が長くなると、祖母が昔から伝わる「またろう」「てんぐ」を持ち出し、制止しようとする箇所などユニークである。また、ちえ子の考えも面白い。祖母の腰が曲がっている理由を「ばあちゃんは、いつもあたしの顔の前に顔をもってこようとしてかがむから、あんなに腰がまがってしまったんだ」と考えたり、大座敷や小座敷・奥座敷・仏間などの部屋があるのに、どうして不便な「離れ」で寝なければならぬのか不思議に思ったりと、幼いながらも、ユーモアに富んだ合理的な思考法である。「子守りうた」と題しているのは、夕方から寝るまでの、友達やその母親達、祖父母から、ちえ子に対して注がれる日常的な思いやりと愛情を示しているのであらう。

【作者の実生活（以下、実生活）】

作者が祖父母の許で育てられた理由は、「二、今村葦子の生い立ち」で述べたように、両親が病弱な次男と乳飲み子を抱えて居たこと、葦子だけは残してという祖父母の要望からである。このことについて、作者の両親は、繰り返し自分達兄妹に語っていたという。また、当時この地方では、祖父母の許で育つ子が珍しくなかったことから、作者は「なぜ自分だけが」という思いを全く抱かなかったし、今でもその思いは変わらないという¹⁶⁾。

「2. 泣きむし」

初春、祖父は縁側で新聞を読んだり、爪を切ったりしている。祖母は洗濯物を干し、ちえ子は、石けんで泡遊びをしている。洗濯を終えた祖母は、好きな花が南国の植物に侵食されると言って抜いてしまう。それを見た祖父が、抜かれた植物を別の箇所に植え直す。その時、垣根の向こうで、保育園に通う子ども達の声が聞こえる。ちえ子は、そつとのぞき見る。通常、五歳から保育園に通うのだが、ちえ子は六歳になっても行くことをいやがる。保育園がどういふところか分からないからである。それに、祖母と一緒にいることが一番楽しく、安心だったからである。

【解説】

縁側での三人の言動は、穏やかで幸せな日々を象徴している。内気で、人見知りなちえ子が、祖父母をユーモラスに捉えると

ころなど、三人の間に流れる信頼感や愛情の深さを読み取ることが出来る。しかし、ちえ子の観察眼は、一方で保育園拒否という事態を生み出す。観察して動くちえ子にとって、保育園は未知の世界である。だから、不安で動けない。同時に、祖父母と離れる不安を抱えている。この二重の不安に押しつぶされそうなちえ子はただ泣くしかない。ここに、他の子と違うちえ子の性格を看取することができる。子どもは、次に何が起るかという予測を立てることを苦手とするから、未知の世界に飛び込んで行くことができる。しかし、ちえ子はそうではない。祖母の心配性を受け継いでいるのか、自分で予想ができないことに不安感を抱き、行動出来ないのである。

【実生活】

祖父政男は、球磨郡内の小学校校長を歴任し、退職後は『球磨郡誌』の編集に携わる。息子忠泰の教育、就職、結婚、子育てに尽くしている。父忠泰の夢は、世界中を回る船乗りであったが、政男の猛反対で断念し、跡取り息子であることから教師となる。作品で、祖父の職業を船乗りとしているのは、父親の夢を反映しているのだろう。祖父が、保育園に行かないちえ子を、無理強いをせず、家で遊んでいればよいという箇所などは、見識ある祖父の考えを窺い知ることができる。

「3. 花まつり」

お寺の「灌仏会」に、ちえ子と祖母が行く。行きは、期待と楽しみで、ちえ子の足は軽かったが、帰りは、疲れて足は重かつ

た。父親に肩車をしてもらう男の子や母親の手にぶら下がるように歩く女の子が、自分たちを追いついていくのを目にし、ちえ子は「はらが立つような、泣きたいような気持ち」になる。そして、「ばあちゃん。ばあちゃんは、あたしのかあさんだよね?」と尋ねる。しばらくして、祖母は「ばあちゃんは、ちえこのばあちゃんじゃ。ちえ子はばあちゃんのちえ子じゃ。…そうじゃろが。それでよからうが」と答え、ちえ子の手を握りしめる。

「4. えんそく」

ちえ子は、保育園に通うじゅん子達から、明日遠足であることを聞く。遠足について祖母から説明を受けたちえ子は、行きたいと訴える。しかし、保育園に通っていないちえ子は、それに加わることができない。ちえ子は、どうしようもないとわかっていながらも、祖母に行きたい思いをぶつつける。根負けした祖母は、お弁当を作り、二人で遠足に行こうと言う。翌日、ちえ子と祖母は、お弁当を持って、保育園児のずっと後を歩いて行く。

【解説】「3」「4」は、祖母について描く。

「3. 花まつり」では、外出用の着物に代える祖母の様子を、「たけのこの皮をむいている」「上から下までひもだらけ」と、ユーモラスに捉えることで、花祭りに胸を躍らせるちえ子の心情を表現する。しかし、帰りは、水筒が「音をたて」ないし、甘いべつ甲飴もなくなり、ちえ子は祭りの後の脱力感で、家ま

での道のりをとでも長く感じる。そして、心配性の祖母が、留守番をしている祖父が魚釣りにでも行つてたら、自分たちは「家なしのかんじんさんになってしまふ」と言うので、ちえ子は、黄昏時の放浪の寂しさや心細さを感じ取る。また、父親に肩車されている子どもや母親の手にぶらさがるように歩く女の子達が自分たちを追いついて行くのに対して、ちえ子の横には、曲がつた腰で必死に歩く祖母の姿があった。疲れと脱力感、黄昏時の寂しさや心細さ、汚れた足袋で一生懸命に歩く祖母の姿が相俟つて、ちえ子は突然「ばあちゃんは、あたしのかあさんだよな？」と尋ねる。しかし、祖母は事実を答える。ちえ子は、いつもの変わらぬ祖母であることを確認し、安心する。帰宅後、風呂から眺める景色は、何時と変わらぬ夕暮れであった。

「4. えんそく」では、ちえ子に対する祖母の愛情が描かれる。祖母は、痩せているちえ子が沢山ご飯を食べて、大きくなることを望んでいる。そのため、食事に気を配り、ちえ子の好物を作る。ちえ子はその思いを十分に汲み取り、頑張つてご飯を食べるが太ることが出来ない。転んで膝を怪我した時、祖母の悲しそうな姿を見ると、ちえ子は祖母の悲しみと自分に対する情けなさで泣いてしまふ。ちえ子と祖母は母子同様の信頼関係で繋がっている。だから、「3. 花まつり」でちえ子が言った「ばあちゃんは、あたしのかあさんだよな」は、戸籍上は祖母と孫だが、精神的にはちえ子が指摘したように祖母はちえ子にとつて母親である。遠足に行きたいというちえ子の思いを痛いほど

理解し、叶えようとする祖母からも、その事は理解できよう。「祖母は私が何をしても大丈夫な人でした」と作者はいう。どんな難題も、祖母はちえ子のためなら何かをしてくれた。ちえ子が祖母に寄せる信頼感はこうして培われたものであろう。

【実生活】

作者だけが祖父の許に残ったわけだが、祖父の家と両親の家は互いの行き来があった。祖父は幼い作者を連れて、両親の転居先を訪ね、母親も妹を連れて、祖父の家に行つて来た。両親の家では、母親が、いつも優しく、笑顔で話しかけ、ご馳走を作ってくれる。兄妹とも存分に遊ぶ。しかし、遊びで興奮し、母親のご馳走が喉を通らない時、「食べたくない」とは口にすることが出来なかった。これが、祖母であつたら、ぐずつたり、すねたり、そのまま寝たりすることが出来た。母親の愛情を感じながらも、生活を共にする祖母に対する信頼は揺るぐことがなかった。祖母は、作者を「内弁慶のアマノジャク」と零し、作者は、祖母には何をしても大丈夫という安心感から反抗もした。作者が如何に祖母に心を許していたかが理解できる。母親は、そのような二人を、そのまま受け入れていたようである。それは、母親の作者に対する愛情の現れととれる。

「5. 川のほとり」

心配性の祖母を後にして、ちえ子と祖父は大川へ釣りに行く。祖母が禁止した、草いちごを食べ、大川での水遊びもする。ちえ子にとつて初めての体験である。そこへ、保育園園長が通り

かかり、ちえ子の両親や子ども達について祖父に尋ねる。ちえ子は、話の内容が気に掛かり、楽しい気分が失せてしまう。帰宅後、祖母に抱かれ、安心するのであった。

【解説】

魚釣りや川遊びは、ちえ子にとって未知の世界である。特に、川遊びは、祖母から「かわろろ」が居るからと念をおされていた。しかし、祖父と一緒にあれば、その世界に足を踏み出す勇氣が出た。水の中で転けた時も、泣きそうになるが、祖父の笑いにつられ笑ってしまう。初めての体験に興奮し、自分にまつわる話を耳にして気分が沈むという不安定な感情が、帰宅後、祖母に抱きつくことで落ち着きを取り戻す。ここでは、子どもが親から離れて、未知の世界へ少し足を踏み入れ、再び親許へ帰り安心するという情景が描かれている。また、祖父のユーモアのある言動も特徴的である。例えば、ちえ子が水遊びをする時、「かわろろは？」と尋ねると、祖父が「かわろろは、ばあさんの頭のなかじゃ」と答えたり、泳いでいる小魚を「はやの子じゃ。やがて大きゆうなる」、ちえ子が「大きくなったら？」と尋ねると、「じいちゃんが釣る」と答えたりする。帰宅し「ちえ、ほら、ばあさんに舌を見せろ」と言って、草いちごでまっ赤になった舌を出させる。おおらかな祖父は、心配性の祖母に対してユーモアのある言動で対応する。

【実生活】

作者の母親は、義父政男を「話し上手でセンスのいい人」と

語っていた。例えば、日曜日になると政男は一週間分の薪を割る。夫忠泰は寝転んで本を読んでいる。そこで政男は忠泰に手伝えというが、忠泰は生返事するだけ。頃合いに政男が「薪割りは紳士のスポーツだぞ」と一喝する。忠泰は飛び起き、手伝うという訳である。忠泰は、熊本師範専攻科で「体育と生理」を選択していた。又、母親は義父政男を先輩教師としてだけではなく、次男の命の恩人としても尊敬をしていた。双子の出産の時、次男が仮死状態で誕生した。当時このようなケースの場合、救命処置をしない。しかし、政男は医師に救命を必死になつて請う。医師は、この子が二十歳までは生きないだろうと念を押し、救命処置を施す。次男の誕生は義父政男のお陰であると、母親は子ども達によく話していたという。

「6. ポケットのなか」

祖父は月に一回、ポケットの付いた洋服を着て、かつて勤めていた船会社に出かけていく。帰宅後、そのポケットの中から宝を探し出すのが、ちえ子の楽しみであった。しかし、その日のポケットには、ちえ子が待ち望んでいたものがなく、がっかりしていたところ、祖父が机の上の大きな箱を持つてくるように指示する。その中味は、へそを押すと泣く、人形であった。ちえ子はそれを片時も離さず、大切にする。しかし、仲良しのじゅん子やほるえとままごと遊びをしている時、いじめっ子の三吉と子分がやって来て、人形のへそを切り裂いてしまう。祖母は怒り、祖父は笑うだけであった。

【解説】

祖母にとつてちえ子は、自分の分身のような存在であつたので、ちえ子が嫌がつたり、悲しんだりすると自分の身を切られるような思いを抱いた。だから、「いつにないはげしい声」で怒り、三吉の家へ向かうのである。一方祖父は、「そうか、あの三吉がな」と言つて、笑うだけであつた。そこには、三吉を温かく見守る目があつた。

【実生活】

作者は物心つく頃から、祖父に連れられ両親の転居先に行つていたが、その道中に楽しみがあつたという。祖父のわくわくするような話や地元の子達との通りすがりの小競り合いが面白かつたのである。小競り合いの時、ただ祖父は、「犬の鎖を引くように」作者の手を引くだけだったという。このような祖父の行動が、物語中のいたずら坊主、三吉に対する笑いとして投影されている。

「7. ぼん花」

八月、ちえ子の家ではお盆を迎える準備をしている。子どもの仕事は、盆花として飾られる女郎花を探すことである。九月には沢山咲くが、この頃は滅多に咲くことはない。しかし、ちえ子は仲良しの二人と枯れた茅の中を探し回り、やつと数本を手にする。家では、祖父母が忙しく動いている。夕方、「お精霊さま」を迎える儀式をし、翌日、盆客を迎える。来客で、家は賑やかになつたけれども、ちえ子は祖父母に声を掛けること

が出来ず、又、見知らぬ家に居るような思いにとらわれ、心細くなる。夜になり、再び三人の生活になつたことに、ちえ子は安堵と喜びを感じる。

【解説】

お盆を迎えるにあつて、ちえ子達の役割は、季節外れの女郎花を探すことであつた。大人達もご馳走を作り、先祖の霊を迎える準備をする。この非日常生活をちえ子は楽しんでた。しかし、沢山の来客で、自分の居場所を失い、祖父母の存在も遠くに感じるようになる。ちえ子にとつて、自分だけの祖父母である生活が、一番居心地が良く、安心できるものであつた。

ここで印象深いのは「お精霊さまをおむかえする」情景である。夕方、足もとが暗い中、家の敷地の外れにある代々の墓に線香を灯した後、点じた一本一本の線香を家まで、道の両端一メートル間隔に立てて行く。そこを「お精霊さま」が通るのがある。そして、暗い室内の中、盆提灯に照らされた仏壇へと「お精霊さま」は導かれる。厳肅な雰囲気包まれた、静かな情景である。夕焼け空、薄暗い道に「ぼちつとあかい」線香の列、流れ漂う青い煙は、朱・黒・薄青で彩られ、幻想的で絵画的情景である。

【実生活】

作者は、球磨村の自然や習俗に対して特別な思いを抱いている。慎ましい自給自足の生活であるが、高度経済成長の煽りを受けてあまり受けることなく、今も村人は、昔からの約束事を守りな

がら、ゆつくりとした時間の流れに身を置く。ネオンサインの代わりに満天の星と月明かりがあり、人工的な音の代わりに大川のせせらぎと風に揺らぐ草や木々の擦れる音、虫の音、鳥の鳴き声などの自然の音色がある。この情景は、日本人が抱く里山風景である。そして、それは今尚この地に存在している。

「8. サークラス」

盆が過ぎた頃、祖父が「脳溢血」で倒れる。ちえ子は、暗い夜道の中、隣に助けを呼びに行く。一命を取り留めた祖父は体が不自由となる。祖父のためにちえ子は、乱暴者の三吉の家に、毎日、牛乳を取りに行く。九月も終わりに頃になると、祖父の体は随分回復する。そして祖父の提案で、三人は街に出かけ、サーカスを見、レストランで食事をする。これは、祖父の祖母とちえ子への感謝の意であった。

【解説】

祖父の病気によって、ちえ子の内面に変化が生じる。これまで祖父母に庇護され、甘えるだけであったのが、祖父母の役に立ちたいと考えるようになる。祖父の動作を手助けし、何かあったらいつでも、どこでも走って助けを呼びに行くという決意もする。このように、強さと責任感が芽生えたことで、ちえ子は不自由な体で美味しそうに牛乳を飲む祖父を見て、涙が出そうになる。このちえ子の成長は、祖父母から惜しみない愛情を注がれて育ったことによって生まれ出たものである。

【実生活】

祖父が倒れた時期は解らないが、リハビリの生活が始まった時、作者の小学校入学について、祖母と母親の間で話し合われる。父親の度重なる転勤で子どもたちが転校せざるを得ないことや、その都度変わる借家の狭さなどの理由で、作者は祖父母の家から学校に通うことになる。入学式には、休みの先生の代わりに、母親がピアノを弾いた。当時教育長であった祖父の配慮である。

「9. お正月」

近所の人びとが集まっぺの餅つき、そして大晦日、正月という日常とは異なっぺ行事を、ちえ子は楽しんでた。正月三日目、実母と姉妹がちえ子の家にやっぺ来る。ちえ子にとっぺ初めての対面である。母親は、祖父に、ちえ子が一年生になることを機に、引き取りたいと願ひ出る。祖父は怒る。真実を知らないちえ子は、祖父と実母の会話や姉妹の話を聞き、漠然と、この人達が自分の家族であることを理解する。が、戸惑いと不安、心細さ、怒りなどの入り乱れた感情に耐えられず、祖母に抱きつき、泣き出す。その晩、祖父はやけ酒を飲み、祖母はちえ子を抱きしめるだけであっぺた。

【解説】

祖父は、六年間預けたままで、今になって返せという理不尽さに怒る。ちえ子の思いを察しようとしなひ息子夫婦に、可愛ひ孫を渡さなひという思いである。

一方、ちえ子の母親は、夫が病氣療養の為、自分が働き、四人の子どもたちを育てなければならぬ。断絶している夫の実家の敷居を跨ぐことは相当の覚悟が必要であった。今、夫の病氣が回復に向かい、ちえ子を迎えることのできる見通しが立ったということであろう。しかし、この思いが祖父に通じることにはなかった。

【実生活】

祖父母の家と両親の転居先は、互いの行き来があった。祖父母を含む一家族が二つの家を持っていたという方が的確な表現かもしれない。そして、両親や姉妹が人吉から一勝地に転居した一年後、父親が発病し転地療養となる。作者が小学二年あるいは三年の頃である。

渡地区は村人達の協力によって生活が営まれていた。長男のいる家は、冠婚葬祭をはじめ、様々な行事をそのまま引き継ぎ、家の役目を果たすというものである。祖父母の家がそうであった。作品で描かれる、餅つき場の提供、近隣の人と協力して餅つきをするということは、当然あったことと想像される。このようなことから、作者は近隣の人々、特に祖母の仲間の人々から可愛がられたようである。

「10. 回転椅子」

実母の訪問以来、祖父母は以前にも増して、ちえ子に優しく接する。雪が降り積もった日、ちえ子が、じゅん子やはるえと祖父の部屋の回転椅子で遊んでいる時、祖父が再び倒れ、一週

間後に息を引き取る。通夜の日、祖父の側には祖母とちえ子が座っていた。ちえ子にとって、そこが一番安心できる場所であった。葬式の日、ちえ子は初めて会った父親に安心感を抱き、数日後、病院に帰る父親の後ろ姿を見て泣き出す。この頃から、ちえ子は両親や姉妹のことを考えるようになる。ある日、祖母はちえ子に事実を話す。ちえ子の父親が肺病になったため、赤ん坊のちえ子を引き取ったこと。母親は、看病と他の三人の子どもの世話で倒れそうな状況だったこと。父親が祖父の反対を押し切って鉱石工場の技師になって以来、親子の折り合いが悪くなったこと。ちえ子を預けたまま一度も会いに来なかったのに、小学入学前に返して欲しいという母親の申し出に、祖父が怒ったこと。ちえ子を祖父母の養子にして嫁に出そうと決めていたこと。祖母は、嫁の立場から母親の気持ちを理解するものの、一度もちえ子に会いに来なかったことや、ちえ子を預かって一年後、妹が生まれたことに、不可解な思いを抱いていること。これらの事を話した後、祖母はちえ子に決意を述べる。年とった自分が何時までも元気だとは限らない。だから、ちえ子を家族の許へ返すことにしたということ。涙ぐむちえ子はじつと、祖母をにらむ。次の日から、祖母は荷造りを始め、ちえ子はだまって、それを見ているだけであった。

【解説】

船乗りであった祖父の部屋には、大理石の時計や探検帽、地球儀など珍しいものが沢山あった。中でも、ちえ子の一番のお

気に入りは、外国製の回転椅子であつた。それは、ちえ子に
とつての遊び道具であつたからである。だから、題名を「回転
椅子」としたのであらう。が、この回転椅子を、祖父を象徴す
るものと捉えることも可能である。世界各国を巡り、幸不幸が
交互に巡り来る祖父の人生を象徴的に捉えたものとして受け取
るということである。そうすると、回転椅子で遊ぶちえ子が、
丁度、祖父に抱かれて遊ぶ姿と重なる。そして、祖父が倒れた
ことを告げられ時、回り続けていた回転椅子は止まり、「いま
までつづいていた笑い声が、ぴたりととま」る。今までのよう
に、ちえ子が笑いながら回転椅子で遊ぶことがもうないかもし
れないという思いを、読者は抱くことになる。

【実生活】

物語の大きな要素となる、両親と祖父母との断絶はフィク
ションである。これは物語の流れから、必然的に生じたものと
考える。船長という祖父の職業や、反対を押し切つて、ちえ子
の父親が鉾山技師になつたという箇所は、作者の父親の思いを
投影しているといえよう。忠泰は、世界中を回る船乗りになる
ことを希望していた。が、跡取り息子であるため、祖父の猛反
対にあい断念する。もし、忠泰が自分の夢を貫いたとしたら、
祖父母が長男忠泰に家を引き渡すことを使命としていたことか
ら考慮すると、親子の断絶は当然考えられることであらう。

祖父の葬儀の時、幼い作者が祖母の袖をずっと握っていたこ
とは事実である。成長した作者が、お墓の草取りを祖母と二人

でやる時、常に思い浮かんだ光景であつた。

両親や兄姉妹が一勝地に転居して一年後、父親が発病し転地
療養となる。宿舎を出た家族は、空き屋であつた山の上の家に
移り住む。母親は生活の為、山の青年学校に勤め、休日は近く
の寺で裁縫教室を開き、その合間に父親の療養先にも通う。そ
のような時期に、祖父が亡くなり、作者は家族の許に戻るこ
になる。作者が小学三年生の時である。

以上、作品前半の解説と作者の実生活について述べてきた。
そして、そこから見えてきた共通点と相違点をまとめると次の
ようになる。

【共通点】

- ①物心つく前から祖父母の許で愛情を受けて育っていること
- ③祖父母に対する信頼感、祖母に対しては特に強い。
- ④祖父の死を機に家族の許に戻ることに
- ⑤父親の発病と入院
- ⑥両親と五人の兄姉妹（ちえ子も含む）という家族構成
- ⑦球磨村の豊かな自然と風俗

【相違点】

- ①祖父母と両親の断絶
 - ②主人公のちえ子が家族の存在を知らなかったこと
- 今村が『ふたつの家のちえ子』を執筆したのは、故郷球磨村
には「都会にないものがすべて」とのつている¹⁷という思い

と、戦後の平和な時代の記憶を多くの人と共有することで希望につなげていきたいという考え¹⁸⁾からである。とすると、作品を読み解くには「共通点」に注目しなければならない。「相違点」は、物語の構成上生み出された、創作的付加ということである。

しかし、これまでの先行研究は、「相違点」から論じられてきた感がある。細谷健治氏や奥野恵氏の論はこの視点からの論である。砂田弘氏が主張した時代背景の欠如は、作品と実生活の相違点の視点からではないが、時代の相違点から述べられたものである。つまり、古き良き時代の生活は今では存在しないという観点である。しかし、作品に描かれた自然や習俗は、多少の変化は否めないが球磨村に今尚、残っているのである。また、都会から取り残された地域にも、その風景が存在しているのではない。

私たち日本人の心の中には里山風景がある。今では存在しないという思い込みがあるため、懐かしいという気持ちが先立つが、周りをよく見ると今でもその風景が残っていることに気づく。そしてその中で、人々は今尚、各の問題を抱えながら生活を営んでいる。『ふたつの家のちえ子』は、誰もが体験している日常生活を、球磨村を舞台に描いたのである。家族の問題を抱えながらも、村で慎ましく暮らす人間を描いたのである。そこには、不思議と、悲壮感が漂っていない。その理由の一つに、時間の流れをあげることができる。そこに流れる時間は、時計の

時間ではなく自然の時間である。ちえ子が祖父母から注がれる愛情、隣近所の人々と助け合う生活、四季折々の楽しい行事は、自然の時間から生まれている。各が抱える問題も、自然の時間の流れで考えると客観的に、冷静に対処できる。自然の懐の中にいる自分を自覚すると、抱えている問題が小さく思える。都会に流れる時間からは生まれ難いものである。

そして、今回の「共通点」に注目すると、今村作品の核が見えてくる。初期四部作から今日までの多数の作品に脈々と流れる主人公やおじいさん、おばあさん、周りの人間が持つ暖かさは、作者が生まれ育った球磨村から生み出されたものである。作者の人間を信じる姿勢が、「共通点」から見出すことができるのである。この姿勢と自然の時間の流れは、作品後半の分析からも導き出すことができる。後半の作品分析は、『ふたつの家のちえ子』論(下)で論じたい。

【注】

- (1) 清水達也「昭和六一年・収穫作品 創作児童文学・高学年」『日本児童文学』1987・7
- (2) 長谷川幸男「創作月刊」『日本児童文学』1987・7
- (3) 砂田弘「なつかしい日本の暮らし」『日本児童文学』1998 9・3
- (4) 細谷健治「ちえ子は逢魔が時をいつ歩むのか―『ふたつの家のちえ子』論 あるいは『家』のイメージについて」『日本児童文学』1998

9・3

- (5) 奥山恵『自分の居場所』をめぐって』『日本児童文学』1993・9
- (6) 宮川健郎『現代児童文学の語るもの』NHKブックス・1996
- (7) 今村葦子氏と筆者(堀畑)の間で交わされた書簡(以下 書簡) 2013・3

(8) 葦子や祖父母の住む渡村と転居先の一勝地とは、列車で一駅という距離である為、父親は祖父母の家からの通勤が可能であった。しかし、赴任地に家族で住まわなければ地域と協力しての学校教育環境作りは出来ないという父親の考えで、家族は一勝地に住むことになる。

(9) 今村葦子「調子はずれのオルガン」『日本児童文学』1994・7

(10) ・(11) 今村葦子「子どもの本は希望を語る文学」『向上』2008・

4

(12) 前掲(7)

(13) 初期四部作とは『つるべっ子』1988・5(初出1980)、『あほうどり』1987・2(初出1982)、『ふたつの家のちえ子』1986・5、『良夫とかな子』1987・5

(14) 書簡 2012・10

(15) 前掲(7)

(16) 書簡 2013・4

(17) 前掲(7)

(18) 書簡 2013・8

作品『ふたつの家のちえ子』の引用は評論社(2008・2)による。

【附記】 本稿の執筆に際しては、今村葦子氏より貴重な資料と御教示を賜りました。また、大瀬敏克先生・節子夫人には、球磨村を案内して頂き、風習について御教示を賜りました。記して深く感謝申し上げます。

(ほりはた まきこ)／大学院文学研究科第二五回修了／
熊本高専(非常勤)